RILAC NEWS

No. 10
2012／6

公益財団法人 荒川区自治総合研究所
(Research Institute for Local government by Arakawa City)

第３回　荒川区自治総合研究所　区民フォーラム

「幸福について　――個人の幸福、社会の幸福」

平成24年１月23日、サンパール荒川において、第３回　荒川区自治総合研究所　区民フォーラムを開催しました。講師として地域コミュニティ研究の第一人者である、千葉大学教授の広井良典氏をお迎えし、「幸福について　―個人の幸福、社会の幸福」というタイトルでご講演いただきました。当日は、町会をはじめとする区内団体の関係者や区議会議員、研究所役員、客員研究員など約270名の方にご参加いただきました。本号では、この第３回区民フォーラムの概要をお送りします。

プログラム

1　開会		
2　主催者挨拶	荒川区自治総合研究所理事長・荒川区長	西川　太一郎
3　来賓挨拶	荒川区議会議長	服部　敏夫氏
4　挨拶	荒川区町会連合会会長	須藤　昌彦氏
5　講演	千葉大学教授	広井　良典氏
6　閉会挨拶	荒川区自治総合研究所理事・所長	二神　恭一

■主催者挨拶

荒川区自治総合研究所理事長・荒川区長
西川　太一郎

区政は何のために存在するのか。主権者であり納税者でいらっしゃる区民の皆様に、「このまちから受ける公的サービスは質においても量においても非常に適切である。このまちに住んでよかった。ここに住んで本当に幸せだ。」と思っていただけるような自治体と、一方「このまちは治安が悪い。役所へ行って相談しても親身になってくれない。」と嫌な思いを与える自治体を比較したときに、明らかに前者が選ばれると思います。ここ数年、荒川区の人口は間違いなく右肩上がりで、私が区長に就任した際の 18 万人台から 2 万人増えて、現在では 20 万 5,000 人を数えています。

もちろん、多種多様な課題が出てまいり、それに対応していく必要はあります。そういう中で、私どもは、2 年前に、議会の皆様ともよくご相談申し上げ、自治体として全国では珍しい、自治体から独立した、総合的な地方自治の調査研究機関をつくりました。皆様のお力をおかりして、おかげさまで昨年８月、公益財団法人の認定を頂戴することができました。

さて、本日、お忙しい中、講師をお引き受けいただきました広井先生は、厚生労働省を経て、現在は千葉大学法経学部教授です。その広井良典先生から、「自治体として住民の幸福について研究していることを、全国に広く知っていただくことが重要ではないか。」というお勧めがあり、『あたたかい地域社会を築くための指標』という本を平成 22 年の 5 月に公刊いたしました。

徳島県の上勝町ではこの本を 200 冊ご購入いただき、職員や議会の方々にお読みいただいたと伺っています。おかげさまで大変好評で、先日も、1,500 冊増刷したいと出版社から話しがありました。また、昨年は、グロス・ナショナル・ハッピネス（ＧＮＨ）を掲げているブータン王国の国王夫妻の来日を契機に幸福度がクローズアップされましたが、荒川区では平成 17 年から荒川区民総幸福度（ＧＡＨ）の研究を積み重ねてまいりました。荒川区や自治総合研究所には、今日まで全国の自治体や大学、経済界などの方々から、引きも切らず視察に訪れていただいています。このように、ＧＡＨの研究は今や幸福度研究のトップランナーとして大きく注目されています。

しかし、自治体が大きな声を出すだけでは幸福度を向上させていくことはできません。その自治体を支えていらっしゃる納税者、主権者である方々や、120 になった町会組織など様々な団体の皆様がまずは幸福を意識して、どう向き合って、どのように質を高めていくのかが大事です。今日、誰よりも自治体のことをよくご存じで、町会をはじめ地域のコミュニティについても大変お詳しい広井良典先生から幅広いご見識を頂戴することは、町会をはじめ地域のリーダーの皆様にとっても大変有益なことではないかと考えました。

そこで、須藤荒川区町会連合会会長にご相談を申し上げ、荒川区町会連合会からご後援をいただくという形で、この講演会を催した次第です。

最近では、自治体や研究機関からの視察だけでなく、マスメディアにも荒川区のことをたくさん取り上げていただいています。例えば元旦のある新聞の社説では、幸福の研究について全国自治体の中で荒川区が唯一取り上げられました。また、NHK をはじめテレビ、新聞、雑誌、いろいろなところで荒川区の幸福の研究について取り上げていただいておりますこともこの場をお借りしてご報告申し上げます。

お忙しい中をご講演いただきます広井先生に対して心から御礼を申し上げますとともに、日ごろから荒川区のために、町内のために、同じ時期、同じ場所で暮らす大勢の区民のためにお力を尽くしていただいております区議会議員の皆様や、また町会をはじめ様々な団体の皆様にお集まりいただき、厚く御礼申し上げます。今日のこの区民フォーラムが荒川区にとってさらなる発展の大事な時間になりますよう心からお願いを申し上げまして、心から感謝のご挨拶とさせていただきます。本日は、お忙しい中ありがとうございました。

■来賓挨拶

荒川区議会議長　服部　敏夫氏

自治総合研究所では、設立よりこれまで２年間、精力的に研究活動が積み重ねられまして、子どもの貧困・社会排除問題については最終報告書を出し、また、荒川区民総幸福度につきましては中間報告書を相次いで発表されましたことはご案内のとおりでございます。自治体経営の基盤強化や質の高い区民サービスを提供するために、多角的かつ中長期的な視点に立って調査研究を行い、政策形成力の向上に資する提言を行うことで、地域社会の健全な発展に寄与するという研究所の設立の目的に向けまして、着実に前進をされてきております。西川理事長さん、また、二神所長さんをはじめ、客員研究員の先生方、また、スタッフの皆様方のご尽力に深く感謝と敬意を表する次第でございます。

先ほど区長さんからもお話がありましたとおり、荒川区は町会や商店街などを中心として地域のつながりが今も続いている、これが本当に強固に機能している数少ないまちの１つであると自負をいたしている次第でございます。実際に多くの町会長の皆様、今日たくさんお見えでございますが、プロジェクトにもかかわっていただいており、大変大きな力

を持った荒川区ではないかなというふうにも思っております。

昨年は３・１１の東日本大震災を受けまして、震災復興、また、絆という言葉が大きくクローズアップされております。ある意味では、これまでの世代間構成というものを、都市部においては、これからは三世代をしっかりと一緒に結びつけていく、そういった視点での展開も必要ではなかろうかと感じている次第でございます。ある意味でこうした大きな転換期をチャンスととらえ、この荒川の中でぜひともしっかりとした地域力を構成していただくため、大きなチャンスメイキングをしていただきたいと私からもお願いを申し上げる次第でございます。

おそらくこれまでの荒川の発展というものは、さまざまな地域の中で知識を得て、また、その知識を知恵となして、この知恵をさらに和となしていく、そういったことが具体的に荒川区民の皆さんの間で実践されてきた、このことこそが大きな成果であろうかと思っております。また、これを最初のステップとし、この後これをさらに大きなステップにいたしまして、荒川の地域の中で大きく拡大ができますように、心からお願い申し上げる次第でございます。

自治総合研究所のますますのご発展と、本日ご来会の皆様のますますのご健勝、ご多幸、またさらに、この荒川区政、本当にすばらしい荒川区と言っていただける地域のために引き続きお力添えいただきますことをお願い申し上げまして、私のご挨拶とさせていただきます。

■挨拶

荒川区町会連合会会長　須藤　昌彦氏

皆さん、幸せですか。昨年３月の東日本大震災の発生以後、地域の絆が注目をされています。住民同士の助け合い、励まし合いが被災者に大きな力を与えていることはご存じのとおりだと思います。荒川区内には現在、120 の町会・自治会が活動しております。防災訓練、防犯パトロール、交通安全、清掃・美化活動、資源回収など、地域住民の良好な生活環境を整えるために活動を行っております。西川区長さんご就任以来、地域コミュニティの核としての町会・自治会活動をご理解いただき、さまざまな支援策をご用意いただきました。改めて感謝申し上げます。

さて、昨年暮れに、荒川区全域に２万個の防火用バケツがまちの辻辻に配置されました。こうした中に地域住民による避難所開設・運営訓練を行い、自らの地域を自ら守るという意識を醸成するのに大いに役立ちました。また、この訓練の中で、木造密集地域の初期消火に役立つバケツ消火リレーを一生懸命に訓練しておりました。私たちはこれを「向こう三軒両隣助け合い」と申しております。私ども町会連合会は、これからも区のパートナーとしての西川区政とともに、安全・安心

で幸せを実感できる新たな絆社会の実現を目指し、努力する所存でございます。

今回、広井先生から、幸せ、幸福について、専門的なお立場から今後の地域力、地域の役割についてのお話を伺えるとお聞きしておりますので、大変楽しみにしております。

以上、甚だ簡単でございますが、私の挨拶とさせていただきます。

講演「幸福について　――個人の幸福、社会の幸福」

講師　広井　良典氏

1961年生まれ。東京大学大学院を修了後、厚生省に勤務。2003年から千葉大学教授。内閣府の幸福度に関する研究会委員、荒川区自治総合研究所地域力研究会客員研究員。

専門：公共政策、社会保障、科学哲学など

主要著書：『コミュニティを問いなおす――つながり・都市・日本社会の未来』（筑摩書房、2009年、第九回大佛次郎論壇賞受賞）、『あたたかい地域社会を築くための指標―荒川区民総幸福度（グロス・アラカワ・ハッピネス：GAH）―』（八千代出版、2010年、共著）、『創造的福祉社会――「成長」後の社会構想と人間・地域・価値』（筑摩書房、2011年）

講演テーマについて

まず、何よりこのような非常に素晴らしい機会に声をかけていただきまして、お話しさせていただくことを本当にうれしく、また光栄に思っておりまして、今日は楽しみに来させていただきました。また、今日は、寒い中をご参加くださいまして、ご足労いただきましたこと、非常に深く感謝し、また、敬意を感じている次第です。

来週、高知県の方に伺う機会がありますけれども、その理由が、高知県がGKH、グロス・コウチ・ハッピネスという指標をつくっているということなのですが、これは明らかに荒川区の影響によるものです。荒川区のGAH（荒川区民総幸福度）が全国に影響を及ぼし始め、また、全国から注目されているということで、本当にこれは素晴らしい、先駆的な試みだと感じております。

今日は町会の方もかなり多くお見えになられているということですが、私はもともと実家が岡山の中心部の商店街にあります。しかし、残念なことに、地方都市にありがちなことですが、親がずっと店をやっていたのですが、半ばシャッター通り化しているような状況であります。そういう意味では、荒川区のようなところはそういったものとは大分違って、賑わいもあちこちにありまして、うらやましい限りと以前から思っておりました。また、町会ということが非常に重要であるというのは、そういった小さいころからの経験か

らも感じてまいりました。私なんかはお祭りをしたり、いろいろな地域とのつながりのほうが、学校のつながりよりも大きかったというような思い出がございます。

町会というのは、どちらかというと古い時代のものが残っているというような感じで、必ずしもプラスに思われていないような時期があったかと思います。しかし、最近はむしろ地域コミュニティというのが非常に重要だということで、町会の重要性というのが非常に再評価されているといいますか、関心が持たれている。学生の中も、町会というものを研究、あるいは関心を持っているという若い世代も非常に増えておりまして、これからはいろいろな意味で町会というものの重要性が高まっていくのではないかというふうに思っています。

それで、そういったことも踏まえまして、今日は「幸福について―個人の幸福、社会の幸福」という、ものすごく大きなテーマを掲げさせていただいております。もちろん幸福について、簡単に幸福とはこういうものだというふうに言えるものでは到底ございませんけれども、本日は、幸福ということについて今どうしてこれだけ関心が高まっているのか、そういったことを少し大きな視点からお話しさせていただき、また、それと地域のつながりというのがどのように関係してくるかというようなことについても少しお話をさせていただければと思っております。

最初に、なぜ今、幸福なのかというような話、それから、コミュニティとまちづくり、社会保障とコミュニティ、それから、3番目の福祉思想の再構築というのは少し難しい言葉になっていますけども、幸福ということを考えるに当たって、いわば日本人にとっての精神的な拠り所といいますか、そういったものが重要になっているのではないかと思っておりますので、そういったこともお話しさせていただいた上でまとめとさせていただければと思っております。

個人の幸福について

この幸福というのは、恐らく関心のない人はいないと思います。普段あまり正面から幸せとか幸福ということについて話したりすることは必ずしもないかもしれませんけれども、人間だれしも幸せになりたい、幸福な人生を過ごしたいというのは、これは万人共通のことであろうかと思います。昨日もNHKで「ヒューマン」という番組で、20万年ぐらい前に私たち人間がこの地球に生まれてからの話を放送しておりましたけども、ある意味では人間というのは、人類が生まれてからずっと、常に幸福、幸せということについては考えてきた。常に幸福ということについて人間は関心を持ってきたということはあると思います。

ただ、先ほどのお話、荒川区のGAH、それから、ブータンのGNHも含めまして、幸福ということについて特に最近は関心が高まっている。去年11月にブータンの国王と王妃が来日されたときに、非常に多くの関心を集めましたけれども、その関係でも幸福ということについて非常に関心が高まっている。それはどうしてだろうかということを考えてみたいと思います。

それで、これは誰しも少し考えれば頭に浮かんでくるようなことになりますけども、個人にとって幸福ということの条件といいますか、どういうものがそろっていたら幸福だろうかということを最初に考えてみたいと思います。

やはり最初に、健康というのは１つまず頭に浮かびます。私は去年 50 歳になったのですが、11 月に重いものをちょっと運びかけたらぎっくり腰で腰を痛めてしまいました。数日間ちょっと立てないような状況になり、その後もいろいろなところにそれが波及して、背中とか、他の古い傷がちょっと痛んだりとか、大変だった時期がありました。今は大体解決したんですけれども、今年に入っても病院に通ったりしています。健康がすべてではありませんが、やはり大事だなと。そういった話をすると、意外に周りにも思った以上にぎっくり腰を経験したという人が多かったりして、少し安心したりするようなこともありました。

それから、生活の安定、衣食住、言いかえれば所得、雇用なども、これはある程度大事である。

それから、やはり人とのつながり。今日、この後いろんな形でお話ししていければと思います。家族、地域、社会、こういったものとのつながりが人間にとって非常に大事です。当たり前といえば当たり前ですけども。ちょっと難しい言葉で承認という言葉を使っています。これは最近、私などの研究分野でいろいろ議論されています。人間というのは誰でも、自分を承認してもらいたい、自分の存在を認めてもらいたいという欲求というのがかなり強くて、人間がいろんな活動をする１つの背景になっているのも承認であり、また、つながりを求める存在であると。これは確かなことだと思います。

あとは、自己実現と言うと少し難しい言い方かもしれませんが、これはやはり自分の生きがいといいますか、好きなことをやって、それにやりがいを感じる、喜びを感じる、これが何より大事なことだと思われます。

それから、これもまた少し後でも出てきますが、自然とのつながりですね。これは人によってさまざまかもしれません。自然にもいろいろありますが、大自然というようなものから、ちょっとした身近な、町なかにある緑とか、そういったことも含めて、自然とのつながりですね。これはやはり幸福の１つの大きな要素だと思います。

それから、ゆとりある時間ですね。人間というのは、どうしてもあくせくしてゆとりがないと、精神的にもいらいらしたりします。ゆとりある時間、これは確かに大事だと。

最近はこのような幸福についての研究というのが盛んになってきています。何が人間の幸福にとって大事なのかというのを実証的に研究するような分野が活発になっているのですが、ゆとりある時間に関しては、睡眠というのもかなり重要であるということが研究の結果としても示されるようになっています。私もかなり睡眠が必要な方というか、寝ている時間は一番幸せなのではないかというように思いますが、やはり睡眠というのは大事だと思います。

それから、後でもお話ししたいと思いますけど、やはり精神的な拠り所というのが、自分の支えになるわけですね。これが重要なも

のであるということです。

この辺についてもう少し見ていきたいと思います。先ほど健康のことを言いましたが、これと多少関連する話です。医療の関係で、大体一生の医療費のうち半分は 70 歳以降で使うというのが現状です。先ほど、ぎっくり腰のお話をしましたけど、確かに私も、だんだん後半になってくると医療費を使う。医療のお世話になることが多いなということを感じ始めていますので、医療の保障というのが 1 つまた大事なことだと思います。

幸福度の国際比較

これは皆様の中で聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれませんが、最近、さまざまな機関が幸福のランキングみたいなものを出しています。国際比較ですね。お手元の資料（資料 1）は、左はアメリカのミシガン大学が以前から行っている調査で、右側はイギリスの大学が行っている調査です。いずれも 1 位が北欧のデンマークですね。割と高福祉・高負担の国としても知られていますけれども、デンマークが 1 位。残念なことに日本の順位が随分低くて、左は 43 位、右では 90 位です。このランキングを見ると日本の順位が随分低いということがわかります。ただ、1 つ注意が必要なことがありまして、なかなかこういうのを国際比較するのは難しいです。幸福というものについても文化の違いというのがあると言われています。例えば日本人はどちらかというと、あまり人に向かって「私は今、幸せです」というようなことを言ったりすることにはちょっとためらいがあるとか、他の人を差しおいて「私は幸せです」

（資料 1）様々な「幸福」指標とランキング

World Values Survey

世界的な調査機関World Values Surveyのもと、ミシガン大学のロナルド・イングルハート教授が指揮をとって、個人を対象に幸福度に関するデータを収集して統計をとったもの。世界97カ国の35万人を対象に、同一の質問を投げかけて生まれた「世界幸福度ランキング」（2006年）の一位は、デンマーク

1位	デンマーク
2位	プエルトリコ
3位	コロンビア
4位	アイスランド
5位	北アイルランド
6位	アイルランド
7位	スイス連邦
8位	オランダ王国
9位	カナダ
10位	オーストリア
11位	エルサルバドル共和国
12位	マルタ共和国
13位	ルクセンブルグ
14位	スウェーデン
15位	ニュージーランド
16位	アメリカ合衆国
17位	グアテマラ共和国
18位	メキシコ合衆国
19位	ノルウェー王国
20位	ベルギー王国
43位	日本
97位	ジンバブエ共和国

World map of happiness

イギリスのレスター大学のエイドリアン・ホワイト教授が指揮をとって、教育や医療制度のほか、GDPなど、社会のしくみの側面から独自にデータを算出して統計をまとめた『世界幸福地図』（2006年）の178ヵ国中の一位は、デンマークだった。北欧5カ国はすべて上位20位以内にランキングされている

1位	デンマーク
2位	スイス連邦
3位	オーストリア
4位	アイスランド
5位	バハマ国
6位	フィンランド
7位	スウェーデン
8位	ブータン王国
9位	ブルネイ・ダルサラーム国
10位	カナダ
11位	アイルランド共和国
12位	ルクセンブルク大公国
13位	コスタリカ
14位	マルタ共和国
15位	オランダ王国
16位	アンティグア・バーブーダ
17位	マレーシア
18位	ニュージーランド
19位	ノルウェー王国
20位	セーシェル共和国
90位	日本
178位	ブルンジ共和国

というようなことを言うことに少し抵抗があるとか、ほかの人のことも気にしてしまうということがあるかもしれません。また、「今、割と幸せだけど、人生全体で見ると、多分、山があり谷がありというような感じなのではないか。だから、今、割と幸せだけど、もしかしたら、もう少ししたら何か不幸せなことが起こるのではないか」とか、「人生全体で見ると、大体どの人もつり合っているのではないか」と思ったりするかもしれません。だから、こういう比較をするときは非常に注意が必要で、そもそも幸福ということについてどのように受けとめるか、感じるか、そういう点があります。

ただ、それでも、今、こういった国際比較で日本の順位が高いとは言えないということは１つ受けとめるべき事実としてあるわけですね。では、どういう形にしていったら、この幸福度が高まっていくのかということを見ていく必要がある。この順位はやや意外というか、もう少し高くていいのではないかと思われる方も多いとは思います。

幸福に見えた江戸時代の日本

それで、この話で、お手元の資料には入れていませんが、１つおもしろい視点があります。それは何かといいますと、江戸時代の終わりや明治の初めに日本を訪れた外国人が日本をどう見ているかという話です。これから幾つか紹介したいと思いますが、非常に興味深いことに、当時日本を訪れた外国人は、日本人ほど幸せに見える国民はないということを言っています。それを二、三、紹介させていただきたいと思います。

例えば黒船がやってきた後のアメリカの初代総領事のハリスが次のように言っています。日本人についての観察というか、感想論です。「彼らは皆よく肥え、身なりもよく、幸福そうである。一見したところ、富者も貧者もいない。これが恐らく人民の本当の幸福の姿というものだろう。私は時として、日本を開国して外国の影響を受けさせることが、果たしてこの国の人々の普遍的な幸福を増進する所為となるのかどうか疑わしくなる。私は、質素と正直の黄金時代をいずれの他の国におけるよりも多く日本において見出す。生命と財産の安全、全般の人々の質素と満足とは、現在の日本の顕著な姿であるように思われる」ということで、日本人が非常に幸福であるように見えるというようなことです。

また、ヒュースケンという人、これは先ほどのハリスに通訳として従った人物のようですけども、さらにこういうことを言っています。「今や私がいとしさを覚え始めているこの国よ。この進歩は本当におまえのための文明なのか。この国の人々の質朴な習俗とともに、その飾り気のなさを私は賛美する。この国の国土の豊かさを見、至るところに満ちている子供たちの楽しい笑い声を聞き、そして、どこにも悲惨なものを見出すことができなかった私は、おお神よ、この幸福な情景が今や終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの重大な悪徳を持ち込もうとしているように思われてならない」と言っています。「おお神よ」とまで言って、日本人が非常に幸せそうであると。これは、あたかも、先ほども言いました、昨年、ブータンの国王、王妃が来たときに、ブータンについて今の日本人が言っていることと同じことを逆に外国人が当時の日本について言っているような印象を与えます。

もう１つだけ紹介させていただきますと、これはもう少し後の明治 22 年にエドウィン・アーノルドという人が言っていることですけども、「これ以上幸せそうな人々はどこ

を探しても見つからない。しゃべり、笑いながら彼らは行く。人夫は担いだ荷にバランスをとりながら、鼻歌を歌いつつ進む。遠くでも近くでも、おはよう、おはようございますとか、さようなら、さようならというきれいなあいさつが空気を満たす。一介の人力車夫でさえ、知り合いと出会ったり、客と取り決めをしたりするときは、一流の行儀作法の先生みたいな様子で身をかがめる」というようなことを書いているんですね。やはり日本人が非常に幸福であるように見えるというふうに言っています。

以上二、三紹介しましたけど、もちろんこれは外国人がある意味では外から見た印象にすぎませんので、そのまま額面どおり受けとめて、当時の日本人は幸せであったと言っていいかどうかは慎重であるべきですし、また、決して今から江戸時代の終わりとか明治の初めに戻るのがいいんだというように単純に言うことはできないと思います。ただ、このように当時の日本について外国人が言っていること、これはいろいろなヒントがそこに含まれているのではないでしょうか。当時の日本人が少なくとも外国人の目に非常に幸せそうに見えたのは、何がそこにあったからなのか。これは考えるに値する、おもしろいテーマではないかと思います。

恐らくその中の１つに、地域のあり方というものがあったのではないでしょうか。先ほどの最後の、「おはよう、おはようございますとか、さようならというきれいなあいさつが空気を満たす」とか、このようなものは地域のつながりに関するものだと思いますし、荒川区で今検討されているような地域力、こういったものが１つ江戸時代の日本にあったものとして、幸福を支えたものとしてヒントになってくるのではないかというように思います。

幸福について考える時代

それで、今、幸福の話を、幸福のランキングや江戸時代の話をしましたけれども、先ほども言いましたように、時あたかもというか、現在、国際的に幸福というテーマに関心が集まっています。これまで言っていなかった例で言うと、時々テレビにも出てくるフランスのサルコジ大統領が、ノーベル経済学賞を受賞した経済学者に委託をしました。その報告書が一昨年まとまっています。これは GDP に代わる指標ということです。GDP だけでは本当の社会や国の豊かさというのは測り切れない、もっと別のものに注目する必要があるということで、その中にやはり地域コミュニティとか、人のつながりというようなものが出されている。

それから、ハーバード大学の元学長も『幸福の研究』という本を最近出されています。幸福について今、改めて考える時代だということで、やはりその中に地域コミュニティ等を出しています。

それから、私もメンバーとして参加させていただいています、内閣府の幸福度に関する研究会があります。これは一昨年に発足したもので、思えばこれも荒川区の影響を受けてといい

ますか、荒川区は数年前からやっていましたので、荒川区の方がはるかに先を行っていたことになりますが、国レベルでも幸福度の研究会が始まっています。その中で、幸福について重要な要因として、先ほどの話と少し似ていますけど、経済・社会面、それから、２番目に心身の健康、３番目に関係性という、関係性と言うと難しく聞こえますが、やはり人と人とのつながりです。それから、後で言いますが、自然とのつながり。そういった、つながりということが大事だということですね。

以上のことから、非常に地域レベルの身近な話でありつつ、こういう国際的なところ、国連もこの幸福というテーマを去年から取り上げていますが、そういうグローバルな動きともつながってくる話題であるということが言えるかと思います。

それからもう１つ、これもおもしろい点だと私は思っているのですが、ものすごい大きな話になってしまいますが、有名なギリシャの哲学者のアリストテレスという人が、幸福と政治の関係ということで、このように言っています。少し読みますと、「我々がもって政治の希求する目標だとなすところの善」――善、よいことを実現するのが政治の目標だと言っているのですが、「あらゆる善のうち最上のものは何であるだろうか。大概の人々の答えはおおよそ一致する、それは幸福にほかならないというのであり、のみならず、よく生きているということ」、これが幸福の意味であるということです。よく生きるというのは何かというのはいろいろあると思いますが、ここでの政治というのは、社会あるいは政治の目標というのは幸福、よく生きることです。ですから、今から 2,500 年ぐらい前に、やっぱり政治や社会、地域の目標として幸福ということが言われた。

これはおもしろいことで、実はギリシャのアリストテレスとほぼ同じ時代に、私たち日本人にはよりなじみの深い、中国の孔子や老子といった人々が生きている。それから、仏教、お釈迦様が生きたのもほぼ同じ時代です。偶然、ほぼ紀元前５世紀前後に、同じように人間にとって幸福とは何かということを語っているということです。これはおもしろいことで、つまり、最初のほうで、人間というのは人類が生まれてからずっと幸福について考えてきたと言いましが、特に幸福というテーマに関心が集まった時代があるということです。それがこの紀元前５世紀ぐらいの時代で、その次が今の現代だと思います。なぜそうなるのかということは最後に考えていきたいと思います。いずれにしても、アリストテレスまで出てきて少し話が大きくなりましたが、今、幸福というテーマが非常にクローズアップされてきているとお話しさせていただきました。

日本社会における「つながり」

これは国際比較の調査（資料２）で、私などが時々引用したりするものですが、先進諸国における社会的孤立の状況ということで、人々の孤立というのがどの程度のものかというのを比較したものです。残念ながら、これを見ると日本は一番右のほうにあって、社会的孤立度が最も高い国だとされている。ここでいう社会的孤立度というのは、主に家族以外のつながりがどれぐらいあるかということです。地域のつながりとかそれ以外のつながり、それがどれぐらいなのかと。それが、孤立度が高いということですね。私は正直なところ、荒川区のようなところはこういったものがむしろ、かなりつながりというのが強い地域だと思っています。これは日本全体の話

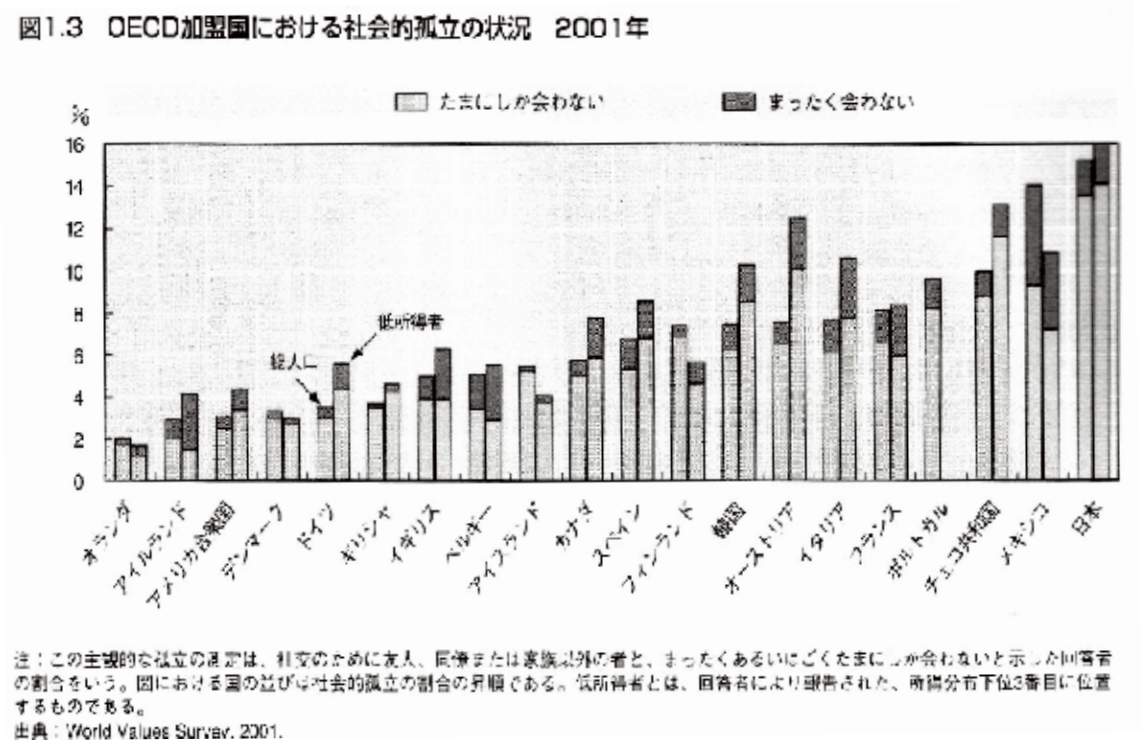
ですので、その辺は地域によって差があるわけです。ただ、いずれにしても、つながりとか地域力とか、そういったことをどうつくっていくかが、今の日本社会で非常に課題になっているということは確かなことだと思います。

それで、ここで農村型コミュニティと都市型コミュニティといったことをご説明しますけれども、これからの時代に割と重要だと私が思っているのは都市型コミュニティということです。どういうことかというと、農村型コミュニティというのはよくも悪くも非常に強いつながり。強いつながりというのは非常に大事なことですが、一歩間違えると、内と外を分けてしまう、閉鎖的とか、そういうものになってしまうおそれがある。そうではなくて、これからは都市型コミュニティ、荒川区はまさに都市、江戸時代から都市の伝統があるわけですけども、都市型コミュニティというのはもう少し緩やかなつながり、開かれているというか、多様性を受け入れるというか、そういった都市型コミュニティ、こういうものがこれからの日本の社会では非常に重要で、それが是正していく１つの方法であると考えます。個人と個人が緩やかにつながるように、そういう開放的なつながり、これが１つこれから大事になると言えるかと思います。

それで、そういったつながりのあり方が、先ほども出てきたように健康水準に影響を及ぼす。つまり、そういったつながりが少なくて、ずっと家にこもっていたりすると、どうしても心身の状態が悪くなったり、あるいは介護などが必要になりがちになってしまう。ですから、心身の健康という面でもつながりというのが非常に重要であるということが、

（資料２）先進諸国における社会的孤立の状況

…日本はもっとも高。個人がばらばらで孤立した状況



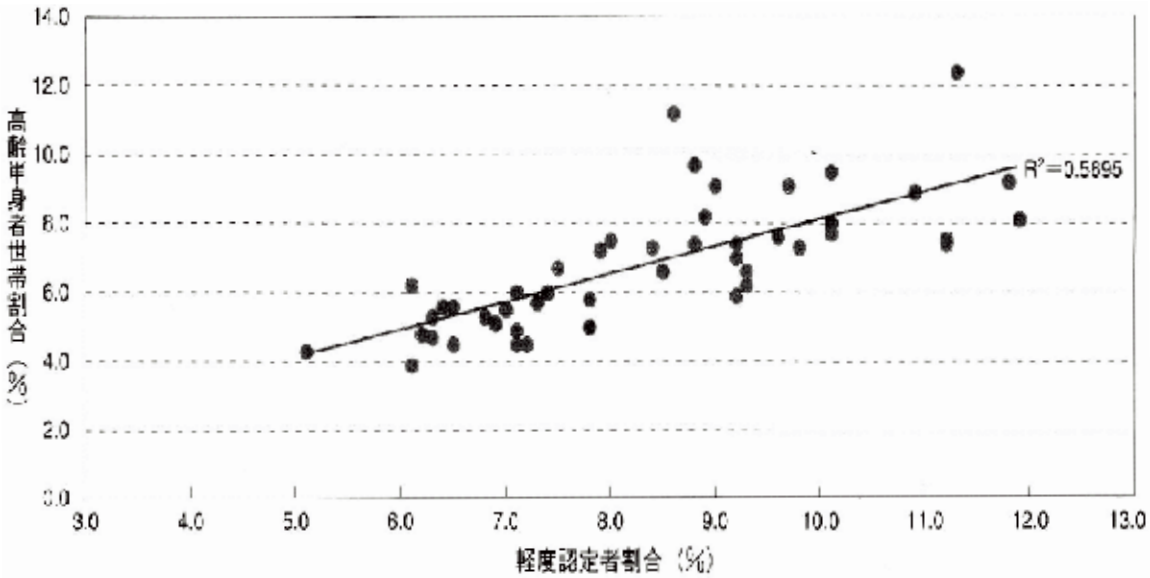
最近、研究分野でも注目されるようになっています。ソーシャルキャピタルなどと言われたりするのですが、要するに、つながりというものが大事であるということです。

地域密着人口の増加

それから、これも似たような話ですけども、これは県ごとに、高齢者の一人暮らしがどれぐらいいるかということと、介護の、ここは軽度認定率、比較的軽いレベルの介護になる割合（資料３）ですが、これを比較してみると、一人暮らし世帯が多いところのほうが介護になりやすい傾向がある。これもある意味で、考えてみればわかりやすいことです。先ほども言いましたが、引きこもりがちになって人とのつながりが少なくなってくると、やはり人間として本来の姿ではなくなって、心身の状態が悪くなってしまい、寝たきりになってしまいがちということです。そういうことがありますので、いろいろな面でつながりということが重要です。ある意味では当たり前のことと言えるかと思いますが、そのようなものが最近研究とか科学の分野でも注目されるようになってきました。いわば古くからの常識に、科学が気づくようになってきたと、そういう状況があるかと思います。

それから、これからの地域ということを考えていくに当たって、もう１つご説明します。このグラフ（資料４）を見ていただければと思いますが、これは何を示しているかというと、人口全体に占める子どもと高齢者を足した割合です。何で人口全体に占める子どもと高齢者を足すかというと、人生全体で見たときに、子どもと高齢者というのは特に地域とのかかわりが強い世代であります。現役の人はどうしても会社とのつながりが強くなりま

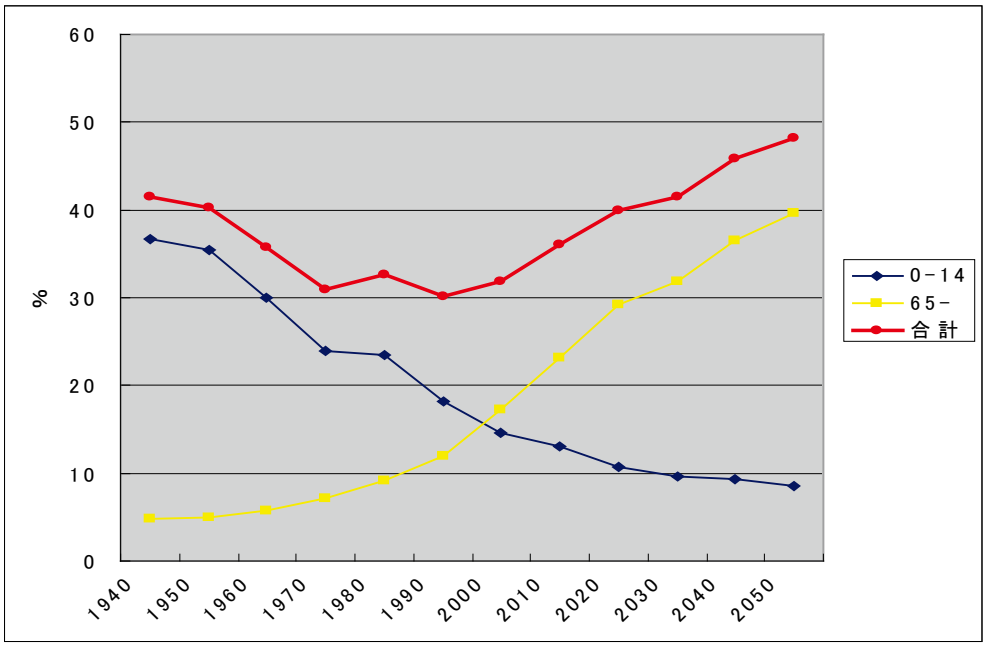
（資料３）高齢単身世帯割合と介護の軽度認定率の相関（都道府県別）



（注）　厚生労働省老健局「介護保険事業状況報告」及び総務省統計局「国勢調査」より厚生労働省政策統括官付政策評価官室作成
軽度認定者割合は2003年の値、高齢単身世帯割合は2000年の値

（出所）厚生労働白書平成１７年版

（資料４）人口全体に占める「子ども・高齢者」の割合の推移（1940-2050 年）
―現在は「地域との関わりが強い人々（“地域密着人口”）」が増える時代の入り口―



（注）子どもは 15 歳未満、高齢者は 65 歳以上。（出所）2000 年までは国勢調査。
2010 年以降は「日本の将来推計人口」（平成 18 年 12 月推計）。

すので、相対的に地域とのかかわりが弱くなりがちなわけですけれども、子どもと高齢者というのは、地域とのかかわりが特に人生の中では大きい時期です。現在は真ん中あたりで、左が過去 50 年で、これからの 50 年が右側なのですが、赤が子どもと高齢者を足した割合で、ブルーが子どもです。これがずっと減ってきていて、黄色の 65 歳以上の高齢者が増えています。

　ということはどういうことかというと、これまでの 50 年というのは地域とのかかわりが強い人が減り続けた時代でした。いわば地域密着人口と言えるかと思いますが、地域密着人口が高度成長期、これまでの 50 年では減り続けました。ところが、今ちょうど谷から右に移ろうとして、これからの 50 年というのは、そういった地域密着人口、地域とのかかわりが強い方が一貫して増えていく時代です。つまり、これまでの時代とちょうど逆の流れがこれから進んでいくわけで、地域コミュニティというものの重要性が高まっていくということが、こういった点からも言えると思います。

コミュニティが醸成されるまちづくり

　次に、地域コミュニティづくりにおける課題・ハードルは何かという、全国の市町村へのアンケート調査の結果を見ると、やはり 1 番の地域コミュニティへの人々の関心が低いとか、先ほども申し述べました現役世代は会社への帰属意識が高く、地域とのかかわりが薄いとか、新住民と旧住民の間の距離が大きいとか、こういうソフト面での課題が指摘されています。こういったところから、地域の

つながりをどうつくっていくか、これが今、課題になっているということがあります。

ただ、視野を広げてみますと、実は、先ほど地域差があると言いましたけど、日本にはいろいろなところがあります。荒川区も含めて東京のような大都市圏もあれば、地方都市、農村部もあります。このような地域に行くと、一番多く指摘されるのは、若者の流出や少子化等のため人口が減少しているとか、また地域経済が衰退し、雇用機会が少ないこともありますし、コミュニティの基盤自体が非常に弱まっているという状況になっているということです。ただ、大都市圏の場合は、先ほど言いましたようなソフト面というか、人と人とのつながりをどのようにつくっていくかということ、これが課題になっているということがあります。

そこで、私などが大事ではないかと思っているのがまちづくりとの関係です。まちの空間を人と人とのつながりができやすいものにしていくという、これが大事なことの１つではないかと思います。先ほど江戸時代の話をしましたけど、江戸時代では、今のように自動車が多くなかったということもあって、道で子どもが独楽を回したり、大人も交じったりとか、地域の中にコミュニティがつくられやすい空間が、いろいろな人が交流しやすい空間があったということです。そのあたりをどうつくっていくかということが課題の１つだと思います。

私が今まで考えてきたのは、ヨーロッパなどのまちが、特に高齢者なども自然にカフェや市場などでゆっくり過ごすのに対し、日本やアメリカのまちというのはやや生産者重視というところがあります。しかし、高齢者などがゆっくり過ごせるような場所が町なかにたくさんあることは、ある意味で福祉施設等をつくること以上に重要な意味を持っているのではないかということで、まちづくりと福祉関係、こういったことを一緒に考えていくことが重要です。また、いろいろな世代が交流できるということ、これが大事なことだと思います。

幾つか写真をご覧ください。これはヨーロッパのドイツの写真（資料５）ですけど、高齢者がゆっくり歩いて過ごせるまちですね。

（資料５）高齢者もゆっくり歩いて過ごせる街（ミュンヘン）

それから、これはヨーロッパで特に北のほう、ドイツとかオランダ、デンマーク、北欧、そういったところには顕著な傾向でありますが、できるだけ自動車を抑制して、歩いて楽しめるまちです。それだけではなくて、まちの中に座れる場所などがたくさんあります（資料６）。

私が印象に残っているのは、日本を訪れた外国人に対するアンケート調査で、日本で一番困ったことという質問に対して、町なかに座れる場所が少なかったと、そのような答えが１位になっています。最初、意外に思うと同時に、なるほどそうかと思いましたが、そのような、まちがコミュニティ空間になるような工夫が、いろいろな形で課題になっていくのではないかと思います。

（資料６）歩行者空間と「座れる場所」の存在
（フランクフルト）

それから、荒川区などではいろいろなものがあるかと思いますけれども、これはドイツのシュトゥットガルトというまちなかの市場の空間（資料７）です。ドイツも日本ほどではないですが高齢化が進んでいて、やはり高齢者の姿がたくさん目につきますね。高齢者が高齢者に売っているという感じです。これは平日の昼ごろの様子ですけれども、しばらく見ていると、本当に高齢者ばかりという感じですね。高齢者専用の市場ではないかと思ったりもしますが、決してそういうわけではありません。

私は、世代間交流というテーマをやってきたこともありまして、いろいろな世代ができるだけバランスよくいるというのが一番理想的な姿だと思っています。しかし、このように、まちの中にゆっくり過ごせる場所がたくさんあるということが、これからの方向として大事なことではないでしょうか。いわばコミュニティ感覚といいますか、そういったことがつくられるような空間を、大きくまちの構造を変えるというよりは既存のものを生かしながらさまざまなことを行いつくる。コミュニティが醸成されるようなまちづくりをするということが課題の１つじゃないかと思います。

それから、これはスウェーデンの例ですが、特にこれは地方都市なんかで非常に問題になっていることですが、東京のような大都市圏ではそのようなことありませんが、どんどん中心部が空洞化していってしまうというところがあります。これはフィンランドのヘルシンキの例（資料８）で、以前は大きなバスターミナルだったところを、バスターミナルを地下に持ってきて公的な住宅を築いたものです。

これからの時代は、職住近接という言葉がありますが、できるだけ職場と住居が接近し

（資料７）高齢者もゆっくり楽しめる市場や空間
（シュトゥットガルト）

（資料８）中心部の再開発と住宅：バスターミナルの地下化と地上部の住宅化（ヘルシンキ）

ているという、そのような方向が望ましいのではないかと思います。

これは悪い例で挙げさせてもらいました。これは千葉大学の近く（資料９）なんですが、浅間神社という割と大きな神社です。浅間神社というのは富士山が見える神社ということで、全国にありますけど、これは実は北斎の富嶽三十六景にも出てくるような古い鳥居があり、そこから富士山が見えるという場所なのですが、残念ながら近くの商店街も車の通りがものすごく激しいです。本当であれば神社という地域の資源、それから商店街、それが先ほどから話しているコミュニティ空間として非常に価値あるものだと思うのですが、それが生かされていないというか、かなり台なしになっているようなところがあります。こういったところも、車が中心にまちができていて、この辺はいろいろ改善していく余地がある。身近なところから考えていくことが必要かと思います。地方都市になると、さらに自動車中心になってくるということですね。私の岡山の実家なんかもそういうところがありますが、商店街が空洞化して、コミュニティという点から見ると非常に改善する点があると思います。

（資料９）改善を考えるべき例：道路で分断された商店街や参道（千葉市稲毛区：せんげん通り）

ですから、福祉とまちづくりということをあわせて考えていくということですね。コミュニティという点からまちのあり方を考えていく、そういう発想が必要ではないかと思います。

田園都市のモデルは江戸時代の日本

ここでまたもう一度、江戸時代の話をさせていただきます。今、どちらかというと外国の例を出して、これは比較的いい例ということでお話ししましたが、まちづくりに関して、緑があって自然豊かなガーデンシティ、田園都市というのがあります。イギリスのハワードという人が提唱して世界に広がった考え方です。ところが、これは最近知って非常に驚いたというか、感銘を受けたことなのですが、実はこのハワードやその流れのレイモンド・アンウィンという都市計画の人が、田園都市を構想するに当たって実は日本をモデルに考えていた、このようなことを言っています。田園都市について書いた本の中でこの人たちが言っているのは、これは明治の初めごろですが、「我々の同盟国民」――これは日英同盟の 1902 年ですね。そのころに書かれたものなのでこういった表現が出てきていますが、「我々の同盟国民である日本人は、桜が開花する時期に行われる最も大きな休日や催しの際に、個々の木のわきに確保された場所に繰り出し、花の下で陽気に騒ぎながら休日を楽しむ。もしも私たちイギリス人に同様のことができるとするならば・・」ということで、田園都市という構想を考えた。

ですから、田園都市というのも何か外国のはるか遠いところにあるというものではなくて、すぐ身近に、むしろ田園都市というアイデア自体が先ほどの江戸や明治の日本を想定しながら出てきたと。日本人にとってはすぐ

身近なところにある。実際、桜の下でにぎやかに騒ぐというのは今でも普通にやっていることですが、それが外国から見ると非常に田園都市という感じがしたのです。ですから、こういった身近にある貴重なものを、その価値をもう一度見直して、それをさらによくしていくという、そういった方向がこれから大事になっていきます。

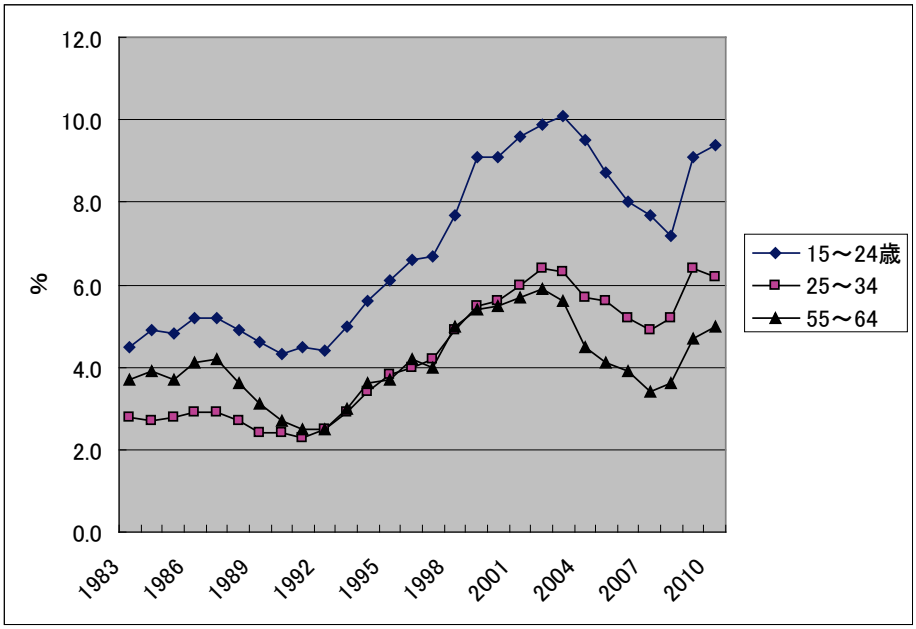
社会保障とコミュニティ

次に、今、話題になっている消費税の話、社会保障と税の一体改革に関連するお話です。ここで重要なことは、このグラフ（資料10）は失業率を示したものですが、最近は若者の失業率が一番高く、15歳から24歳、25歳から34歳の若い世代の失業率が高齢の世代の方の失業率より高い状況です。つまり、以前のように雇用が幾らでもどんどん拡大成長していくという時代ではないので、どうしても入り口のところでブレーキがかかる、ハードルが高いという状況です。

それから、生活保護などが全体に増えているということは、これは200万人を突破したとか報道などで聞かれた方もいるかもしれません。

重要なこととして、1つは、私は人生前半の社会保障と言っているんですが、高齢層の方への社会保障が重要なことは言うまでもありません。しかし、最近は失業率などを見ても、かつてと違って人生の前半にいろいろな困難が及んでいる。サボって働かないわけではなくて、仕事自体がないと、そういう状況がある。従いまして、子供や若い世代への支援ということが非常に重要になってくる。そういう意味では、荒川区が以前から、それこそグロス・アラカワ・ハッピネスの関係で子どもの貧困の問題を取り上げておられたりするのは、非常にこれも先駆的な試みで、価値あるものだと思います。それから、もう1つ重要なのは、これからの社会保障の方向として、できるだけ予防的な方向、つまり、貧困に陥る前、仕事を失う前、あるいは病気や介護になる前に、できるだけ早い段階から支援をしていくことです。そこで、コミュニティや人とのつながりということが出てくる。そういうところに人々が入っていける、

（資料10）年齢階級別失業率の年次推移
―若者の失業率のほうが高齢者より高―



（出所）労働力調査より作成

そういうつながりがしっかりしていることが、結果的に生活保護や、さまざまな社会保障費を減らすことになります。こういった意味でも、地域のコミュニティ、そういったものが重要になる。

少し難しい言い方をすると、コミュニティ経済ということですね。コミュニティ経済と言えるようなものがこれから大事ではないか。コミュニティ経済というのは、わかりやすく言えば商店街のようなところですね。経済の場であり、またコミュニティであり、そこで人とのつながりがさまざまにある。そういったコミュニティ経済というようなものを地域の中でつくっていく必要がある。コミュニティ経済とは、いわば人、物、金が地域で循環していくような、そういった姿です。これはよく言われることで、近江商人の家訓というのに「三方よし」という話があります。これは皆様ご存じのとおりですが、「売り手よし、買い手よし、世間よし」ということですね。単に利潤を最大化するというような意味の経済ではなく、コミュニティが重要であると。相互扶助と経済が一体になっているのです。そういう姿がこれからの時代に重要です（資料 11）。

（資料 11）「コミュニティ経済」の重要性

・かつては「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」が融合（農村が典型。商店街なども）・・・高度成長期以降、両者が分離。
→「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」の再融合が課題。

・また、かつては経済活動自体がある種の「コミュニティ」的性格を持っていた。
ex. 商店街　近江商人の家訓「三方よし」

・コミュニティをできる限り何らかの経済（生産）活動と結びつけつつ生活の中に組み込むような政策の重要性。
・例１）“福祉商店街”・・・商店街をケア付住宅（子育て世代や若者向け住宅）等とも結びつけつつ世代間交流やコミュニティの拠点に。「買い物難民」減少という効果も。また、若者の雇用などにも意義。
・例２）都市型農業・農園と結びついたコミュニティづくり
農業・環境と医療・健康をつなぐ　「自然との関わりを通じたケア」
・例３）自然エネルギー拠点とコミュニティづくり
“鎮守の森・自然エネルギーコミュニティ”
・例４）団地と世代間交流～団地コミュニティ経済

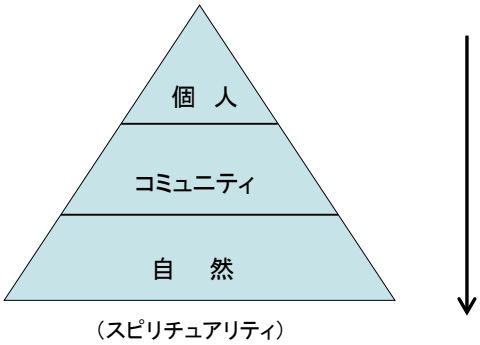
福祉思想の再構築

次に皆さんご存じのタイガーマスクの話です。私がちょうど小学校のころタイガーマスクをやっていたので、漫画本も家にまだ持っていたりしますが、タイガーマスクこと伊達直人が最初は群馬県あたりに、今は全国に出没しています。こういったことが見られると、人々の求めているものが高度成長期とちょっと変わってきている。経済がとにかく大きくなればいいという時代から、タイガーマスク現象のような、何か人にしてあげたいし、そういうことで自分としてもうれしいという、そういうものが出てきているということで、ちょっと難しい言い方をすると福祉思想というものが求められている。

そこでポイントになってくるのが、やはりつながりということですね。ここにピラミッドのような絵（資料 12）を書いていますけど、一人一人の人間、私たち個人の底にはコミュニティ、地域社会というものがある。さらに自然。ここでは自然と書いていますけど、これはもうちょっと広い意味で、場所とか土地といったものですね。この場所への愛着、この土地への愛着、そういったものがベースにあるということです。それが戦後の高度成長期を中心に、コミュニティとか自然、土地というものとのつながりが非常に途切れがちになったわけですね。これをもう一度回復していくということがあります。

ここで 10 分ぐらい映像をごらんいただいて、大体私の話をそれでまとめにしたいと思います。これから見ていただく映像は、荒川

（資料 12）「つながり」の重要性
ー個人・コミュニティ・自然ー



現代社会では、個人はその土台にある「コミュニティ」や「自然」、ひいては「スピリチュアリティ」（精神的なよりどころ）とのつながりを失いがち。

区のような大都市の話ではありません。これは実は昭和 30 年代の、岐阜県にある村の話です。これからご覧いただくのが、NHK で数年前に放映された「プロジェクト X」の桜ロードという映像です。これは何かといいますと、当時、とにかく全国にダムをどんどんつくっていました。岐阜県の荘川村という村では、ダム計画ができて、村全体がダムで沈むことになってしまった。村の人々は最初、それは絶対反対ということで抵抗するんですが、これは国の発展のためということで仕方ないということで、最後は承諾します。

ただ、村の人々の中から強い要望として、村にずっと立っている桜の木をどうしても何らかの形で残したい、沈まないようにしたいという強い思いが出てくる。このあたりからプロジェクト X 的な感じなのですが、そこに東海一の植木職人という人が登場します。桜というのは非常に繊細な木で、移植というのはほとんど不可能と言われているそうですが、その桜の移植作戦を試みて、最後、ようやくダムに沈まないところに桜を移して、村人たちにとってはそれで心の拠り所ができた、残ったというような話です。その最後の 10 分ぐらいの映像を見ていただければと思います。

〔ビデオ上映〕

これは皆様それぞれに感じられたことがあると思いますけど、最初放映されたときに、私は非常に感動的なものだと、これはすばらしいと思いました。現在は DVD 化されましたので、もし全体を見たいという方がいらっしゃいましたら、見ることができると思います。

内容的なことについては、これにはすべてのつながりということについての様々な要素が含まれていると思います。地域の人々のつながり、桜に象徴される自然とのつながり、場所や土地へのつながり、愛着。それから、おじいさんと孫の話が出てきますが、これは世代間のつながりですね。そういったものが人間にとっていかに大事であるかということが示されていると思います。それからもう 1 つは、幸福ということについて、今日のタイトルを「個人の幸福、社会の幸福」としていますけど、職人の方が最後亡くなられるわけですが、幸福という点から見れば、非常に幸福な人生だったというふうにも思いますし、いろいろなことを考えさせられる映像だったかと思います。

それからもう 1 つ、これに関して補足しますと、私が 1 つちょっとした希望を感じていますのは、最近の学生や若い世代で、地域とかローカルなものに関心があるという方が結構増えている印象を持っています。例えば、静岡出身の学生が、自分の生まれたまちを世界一住みやすいまちにするということをテーマにしていたり、新潟出身の学生が、新潟の自分のまちを、農業をいかに再生するかということをテーマにしたり、それからさらには、これからの時代は愛郷心ということが

大事だという、愛郷心をテーマにする学生がいたりします。いわば例えて言うと、地域への着陸というか、これまでの高度成長期が地域から飛行機が離陸していくような時代であったとすれば、これからは地域に着陸していくような、そういうようなことが若い世代の関心になって出てきています。全部が全部そうではありませんが、そういう１つの大きな流れも出てきていると思いますので、そういったものを大事にしていくことが大事かと思います。

それから、その後は福祉思想などのことも書いています。そこでは神、仏、儒、つまり神道、仏教、儒教という形で書いていますけど、日本人が持っていたそういった基盤をもう一度大事にしながら、これからの時代を考えるということが大事ではないかということです。

なぜいま「幸福」か

実は、先ほどアリストテレスとかいう話までしましたけど、当時と今とは非常によく似ていて、当時の紀元前５世紀ぐらいの時代は、ちょうど農業文明が限界に達して、拡大成長という時代から、成熟というか、私は定常化と言っていますが、そのような状況になっていった時代でした。そのような時期に、幸福ということへの関心が高まった。

（資料 13）「幸福」について考える時代（１）

- 現在、「幸福」研究や「ＧＤＰに代わる指標」への関心が高まっているが、人間の歴史を大きく振り返ると、人々がとりわけ「幸福」について考えた時代がもう一つ浮かび上がる。
  →紀元前５世紀前後の「枢軸時代」（精神革命）。
- この時代、地球上の各地において、普遍的な原理を志向する思想が”同時多発的“に生成。しかもそれらはいずれも何らかの形で人間にとっての「幸福」の意味を追求。
- ギリシャ：ex.アリストテレス　幸福＝よく生きること
- 仏教（インド）：慈悲、ニルヴァーナ（涅槃）
- 儒教など（中国）：徳、仁など
- ユダヤ～キリスト教：愛

ちょうど今の時代も、この二、三百年続いた産業革命以来の産業文明とか工業化時代がある種の限界に達しています。物質的な生産をどんどん拡大していくということではなくて、もう少し人とのつながりとか、質的な、あるいは文化的というか、そういった発展に方向を切りかえていく、そういう時代ではないかということです。そういった中で幸福というテーマが浮かび上がってきているのではないかと思います（資料 13・14）。

（資料 14）「幸福」について考える時代（２）

- 枢軸時代は、農業文明の技術パラダイムが飽和し、環境破壊（森林伐採、土壌侵食等）などの限界に直面していた時期。・・・近年の環境史研究
  ・・・物質的生産の量的拡大から、内的・文化的発展へ。
  →「幸福」への問い
- 一方、現在という時代は、ここ 200 年強続いた産業文明のパラダイムが飽和しつつある時代。→その意味で枢軸時代と類似した時代状況にあるのではないか。
  ・・・単なる物質的生産の拡大ではない、「幸福」の意味や価値を考える時代。

ということで、最初に江戸時代の話をさせていただきましたように、そこから１つ出てくるのは、やはり地域やいろいろなつながりということが、当時、外国人が日本を見て幸福だというふうに感じた１つの基盤にあったことだと思いますし、田園都市の話もしましたが、幸福というのは非常に遠く離れたところではなくて、案外身近なところにあるということで、身近なところから改善していくということが１つ大事かなと思います。

以上、大変雑ぱくなお話でございましたけど、以上をもちまして私のお話とさせていただければと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

※　本号で掲載した資料は、講師が作成し当日使用したものを一部抜粋・加工したものです。

■閉会挨拶

荒川区自治総合研究所理事・所長
二神　恭一

本日は非常に寒い中、町会・自治会の幹部の方を中心に、私たちの区民フォーラムに多数お見えくださいまして、大変盛況のうちにこのフォーラムを終了することができますことを厚く御礼申し上げたいと思います。

今、広井先生から大変すばらしいお話を頂戴いたしました。幸福の問題あるいは地域力の問題を考える上で大変示唆に富んだ助言を頂戴したように思います。広井先生には地域力の研究プロジェクトの客員研究員をお願いしていますので、今後ともご指導をいただきたいと思っております。

また、本日は区議会議員の皆様にもお見えいただいておりまして、服部議長からはご来賓のご挨拶を頂戴しました。本当にありがとうございました。

また、荒川区町会連合会におかれましては、本日の区民フォーラムのご後援をいただき、さらに須藤会長からはご挨拶を頂戴いたしました。厚く御礼を申し上げます。

私たち荒川区自治総合研究所は、今後とも荒川区のシンクタンクとして頑張りたいと思っておりますので、今後ともご理解、ご指導のほどをお願い申し上げます。

内閣府経済社会総合研究所主催「幸福度に関するパネルディスカッション」に西川区長がパネリストとして出席

平成 24 年３月 19 日、内閣府経済社会総合研究所主催の「幸福度に関するパネルディスカッション」に西川区長が出席しました。このパネルディスカッションには、政府の幸福度研究会座長の山内大阪大学教授をはじめ、幸福度研究に取り組んでいる福井県、兵庫県、京都経済同友会もパネリストとして出席し、それぞれの取り組みの報告や意見交換を行いました。

西川区長は、「幸福度を行政に取り入れるには、地域にあったものにすることが必要で、基礎自治体というレベルが最も適していると思う。また、役所は自分の領域を決めたがるが、住民の要求にはそのような壁はない。『この仕事は国が、都が』と言っていると、タイムラグが生じ、幸福度を阻害する要因となる。住民に最も身近な基礎自治体にもっと財源・権限が委譲されれば、住民の幸福度を上げることにつながる。」

「幸福度研究の目的の１つに、行政評価の改善がある。これまでのようなアウトプット中心の行政評価を改め、住民の幸福を行政の究極のアウトカムとした行政評価としていきたい」などと発言しました。

フランスのレンヌ大学等の研究者が荒川区を訪問

平成 24 年３月 21 日、レンヌ大学教授のアンベール氏をはじめとした研究グループが、荒川区を訪問され、意見交換会を開催しました。訪問された研究グループは、市民の幸福感を改善するための地方自治体による試み等について調査をしており、市民生活の質を測定する荒川区民総幸福度（ＧＡＨ）の取り組みに関心を持ったことがきっかけで今回の意見交換会を開催することとなりました。

意見交換会では、研究グループ側からは「市民に対しどのように正当性を確保するか」などの質問や、「経済的に豊かなところは社会的には貧しい傾向がある」などの意見が出されました。区側からは、「幸福度の取り組みは地域レベルが望ましいと考えている。区民の皆様と共に幸福について考え、指標作成や幸福度の向上に取り組むことが重要と考えている」などの意見が出されるなど、活発な意見交換が行われました。

平成 24 年度事業計画

1　調査研究・政策立案支援事業

区の課題や問題等について、多角的かつ中長期的な視点に立って調査研究を行う。さらに、区の各部署が抱える課題の解決や戦略的な政策形成に資する助言・提言等を行う。平成 24 年度の研究テーマは、次のとおりである。

○荒川区民総幸福度（GAH）に関する研究プロジェクト
○地域力研究プロジェクト
○親なき後の支援に関する研究プロジェクト
○ＣＳ（顧客満足）と職員のモチベーションに関する研究プロジェクト

2　人材育成事業

⑴外部の研究者との共同研究による区職員の政策形成力等の向上

区から派遣された専任研究員や研究会及びワーキング・グループに参加する区職員が外部の研究者とともに調査研究を行うことにより、調査研究のノウハウ、政策形成力等の向上等を図る。

⑵幅広い参加機会の確保による区職員の能力向上等

荒川区職員ビジネスカレッジ（ABC）との連携講座の実施や論文の寄稿募集など、区職員の幅広い参加の機会を設け、区職員の問題意識の醸成や能力の向上等を図る。

3　情報収集・情報発信事業

⑴地域力に関する本の発行

ＲＩＬＡＣライブラリー第３弾として地域力に関する本を発行する。荒川区の地域力の良さをさらに強めながら、新たな絆やこれからのコミュニティ・地域力をどのようにつくっていくのか、荒川区の特徴的な取り組みについての寄稿、学識経験者等の論考等をまとめた本を発行する。

⑵調査研究成果の公表

研究所の調査研究成果について、区はもとより国、都、全国の自治体等に幅広く公表する。

⑶「RILAC NEWS」及び「GAH NEWS」の発行

研究所の活動を PR するため、ニューズレター「RILAC NEWS」を発行する。また、荒川区民総幸福度（GAH）に関する最新動向等をお知らせするため、「GAH NEWS」を発行する。

⑷ホームページによる情報の発信

研究所のホームページの充実を図り、研究所の概要、調査研究活動、研究報告などの情報を、幅広く区内外に発信していく。

⑸区民フォーラム等の開催

研究所が取り組む研究プロジェクトをテーマに区民フォーラム等を開催し、研究成果についての報告や有識者等による多角的な視点での議論を通して、区民や関係者等に研究プロジェクトについて理解・協力をいただくとともに、今後の研究活動に活かしていく。

※　ＲＩＬＡＣ　ＮＥＷＳ　Ｎｏ．９でお知らせした「親なき後の支援に関する研究会」の構成員が、平成２４年４月１日付け人事異動により、次のように変更されました。
荒川区
和気　剛　福祉部長　→　高岡　芳行　福祉部長

RILAC NEWS No.10（平成 24 年 6 月発行）
編集・発行　公益財団法人荒川区自治総合研究所（RILAC）
住　所：荒川区荒川２－１１－１　　ＴＥＬ：03-3802-4861　　ＦＡＸ：03-3802-2592
ＵＲＬ：http://www.rilac.or.jp/　　メール：info@rilac.or.jp